

連絡二ユーリス

日本海

永田俊

50

第 51 页

新潟市万代島
日本海区水產試驗場

印刷
新孔版
昭和30年4月1日発行

のよくな健やも出でて定置網の改良に尽力した結果、この漁業に関する限り非常に発達し、現在でもイワシ漁網とか、タラ漁網等の如

期せられず、その後進性を械い去ることは出来ないことを記すべきである。

主なる項目 第五十一号

（日水研）開発部

羽原又吉博士日本学士院賞受賞者と決定
第三回日本海イノシシ原況子類会議は山形水試で開催
沿岸資源調査担当者会議開催
第三回日本海漁業調整委員会連絡協議会開催
昭和三十年度村馬暖流資源調査に関する
研究連絡会開催 内閣
内閣
内閣
内閣

卷之三

○人 事 異 動

羽原又吉博士日本学士院賞受賞者と決定

慶大経済学部羽原又吉博士の日本漁業経済研究会に於し、去る三月十二日開催の日本学士院例会に於いて日本学士院賞受賞者と決定した。

山形水試で開催の予定
る三月のアロック会試の申合によつて

今年度のイワシ漁況予報会式は、例年の如く関係者が集合協議して発表するようなことをせず、日水研に集つた資料を検討して、文書として通じることになつていた。

ところが第一回の予報の為に資料を検討したところ、今年の海況状態が例年見られる程

従来日本海の漁業は太平洋方面にくらべその後進性が指摘されといふが、定置網についても必要以上に規模が大きくなる結果漁夫が多くなるとか、あるいは封建性が根強いとか色々の事を云われてゐる。しかしながらといっても日本海の定置網は歴史も古く、地形的条件にも恵まれ、社会的関係とか太平洋方面の如く、遠洋漁業がないという事等から、他の漁業より眞本漁業として発展する条件に恵まれていた事はいなぬない。その上富山旁の如く地形的、資源的条件に恵まれ、かつ潮流のゆるやかな事等から古くより台網が发达し、しかも大西彦右衛門とか上野八郎右衛門など

二重透しの活用、合咸鐵維の使用等はそれ
がよいと分れば自然と行われだすものである
それよりも漁民の意識の向上というような是
非必要な事であつても、色々の関係で非常に
実行され難い事を大きくとりあげるのが、特
に封建性の根強い日本海の足置網業界の問題
でもあり、又今後のありかたでもあると思ふ
そしてこの問題が解決されない限り、いくら
經營が安定しても日本海の漁民の眞の発展は

せず、日水研に集つた資料として通知することになったところが第一回の予報たところ、今年の海況は度の変異とはるかにこゝの象と呈しているので、本するのか最も難と思ふのが深い方面と相談の結果、水試で用い催の予定である。

資料を検討して、文書
なつて、いた。
紙の為に資料を検討し、
状態が例年見られる程
えて、特異的な異状現象
事ととつて參集湯はれたので、最も関係
来る四月九日山形研
(日水研)

沿岸資源調查担当者會議用稿

昭和二十四年以来全国的組織のもとにイワシ資源調査が実施されて来たか。他の重要な総合的調査を行う必要が認められ、今年からはサバ・スルメイカを併せて「沿岸資源調査」として再出発することとなり、そのための担当者会議が三月三日東海区水研で開かれた。

る漁獲の影響」という問題についての各海区の研究結果が報告された。これによると、東海、南海、日本海三海区の研究結果はほぼ一致し、二メートル以上の大型魚については漁獲が資源に危険な圧力をかけていることは認められないこと、近年の漁獲減少は酷暑によるものよりは、他に原因があると考えられること、等の意見が出た。ただし未成熟小型魚に対する漁獲の圧力については、未だ決定的な結果はなく、今後の資源調査の重点がこの未成熟小型魚に対する漁獲効果と、その他の要因(食害等)の解明に向けられるべきとの意見の一致があつた。

スルメイカについては現在北水研のみで、またサバについては裏日本水研での馬腹流調査の一部として実施されているのみで、全国的に見た研究は非常に立ちおくれがあるが、今後は各海区とも必ずイワシ調査にかみ合せてサバ、スルメイカの調査とも実施するよう申し合せた。

今後日本海区水研では從来馬腹流調査の一部であつたサバ調査は更に強化し、これにスルメイカを加え、從来のイワシ資源調査とともに一貫的研究を行ふ予定である。

第三回北日本海漁業調整委員会
連絡協議会開催

京都府より秋田県に至る日本海北部の府県の連合海区漁業調整委員会と構成員とする漁業調整委員会連絡協議会が、三月八日及九日の両日にわたり新潟県岩船郡村上市瀬波において開催された。来る春、京都、福井、石川、富山、新潟、山形、秋田の各府県水産課係員及び各府県連合海区漁業調整委員会委員並びに事務局書記の面々であり、水産庁よりは源政郎、渕井、調整第一課より藤村技官と石川、事務官が出席し、当日水研よりは所長と調査室員が出席した。今年は第三回の協議会に当

リ、特に漁業法改正の声から漁業界にきかれ、政府又その改正を立案検討の時期に当るので、特に多數集合し感会であつた。地元新潟県よ

りは県知事代理岡村農林部長を始め多數の委員、県水産課長以下の更員、委員会事務局員等が来場。会試運営等に当り、会試は地元運合海区漁業調整委員会会长大橋宗吉氏が議長となり選出され、提出試題につき審試に入り、両題が詳細検討審試と要する事項については専科会を開き総括するなど大体円滑且充実した

審議を行ない兩日の会議と終つた。分科会は漁業権問題と漁業調整委員会及びその書記の身分等の問題であつて、提出議案の中心問題はこれら二つに大体集約することができた。漁業権問題は特に定置漁業の存続期間の問題

とその経営の問題 又商業权の物的性質と
一層重視して債貸を認むべきか否か 憲法
同組合との保有主体として、この場合のみ
債貸を認むべきである。等が論議の中心であ
り、水産厅所長との間に名義の意見の交換が

海陸観測を行い従来より観測回数を増して予報に万全を期す事に努めた。

昭和三十年度対馬暖流資源調査に関する研究連絡会開催

(一) 三月十六日、十七日の両日に亘り日本水研
会で水産庁、東大、日本海沿岸十二府県の高
原者約四〇名が參集し、昭和三十年度の対馬
暖流ならびに資源調査に関する研究連絡会議
開催された。なお今回は三十年度の予算が決
定しておらないので補助金、委託費について
は試験にのぼらなかつた。

三月十六日(九時開会)
二、一、
株式会社の辞退
日水研究所長

三、議長選出
（日水研究所長）

對馬暖流關係
二九年度經過報告

名水錄卷之二

であったたゞハ調査は更に強化し
メイカを加え、從來のイフシ原原調査とともに
一貫的研究を行ふ予定である。

(2) 大羽イワシ漁況予報調査について

大羽イワシ漁況予報調査について

大章 講本と云うのか、あつたようには思う。それは、誰でも気軽に読めるものらしいがそれをさえ読んでない始末だから、文章道に格別の関心があるわけでもない。しかし、時には、どうしても書く必要に迫られて、筆を執るのは私のみではあるまい。

魚探

47

内 檄 素

語り言葉には、トリックもあり、魔術の様な群引もある。其上あやが多くて、聞きようによつては、どうにでも受取れると云う不完全な日本語について、多少とも皆がこりているからでもあろう。

ところが、一代のジャーナリストであつたエフ・ダ・ウエルズの語り言葉が、あの文化史大系に

なつたと云うことだか、私がそんなことを
まねたとしたら、出来あがつた文草は、読む
に耐えないのである。心して、書いたもので
も日を経て読んでみると、汗額の外ない代物
であることがわかる位だから、まして苦り言

海洋観測を行い従来より観測回数を増して予報に万全を期す事になった。

葉と記録にするなどは、恐しい仕事で、やは
り署り言葉と文草は、当分区別しておきたい。
大は人なりとも言う相だが、第私自身にしても、そ
んじよそこらを見ても、各自との人だけのことしか文
章にかけないものようである。つまり、人の歌し出され
たのが文草だと思われる。私はこんなな物で御坐
えすと広告しているのが、文章であるから、時には自から立
めて魂と天下曝しているにもならないとも限らない。
こんなことを早くも見点してるのであろうか。書くこと

をしゃがる何を決して少なくない。しかしこれと反対に何とはなしに書きたいと云う物をじぶない向むから、更に書くことによつて天下に名をなしたいと云うのも相当ある。こうした類とは、別に外に目的があつて、文章の黙力を振つて、利己的な優越感に浸ることを表ひとする者もあるが、これに到つては、最早論外で、文章道とは縁がないことは、言うまでもない。しかしながら、ここで希うことは、魂を天下に曝すなどと云うよつた大げさなことを言わないで、出来の悪いのは、恵被のつもりで、各人が托会ある毎に文章をものにしたいものである。多くの人々が、書くと云うことは、多くの者が読むことにどこかで続いている。多くの者が、書き且つ読むことは、そのうちに良いものを生み出す大事な基礎が、出来つつあることである。私共がかかるが、どうした古與も急に造られた物ではなく、多くの人々が書き且つ読むと云う階地があつて、いにかけてくれた最も優れたものの残りを指すのである。古與と呼んでるのは、人間のつくりなす「史」がよくある事であるから、正しく見、それをすくなむに美しく表現する文章をいたしももつと書きたいものである。

(4) 大網イワシ漁況報送について
日水研では実施しないことになった。

以上の大網航期日は所長会議で決定するが、大体大月八月の間である。なお各水試においては舊鷹丸回航と期と同じにして漁場試験と出来るだけ実施する。

(5) 大網イワシ漁況報送について
日水研では実施しないことになった。

以上の外に対馬暖流關係においては左記事項が要望又は改正された。

(a) 三〇年度より日水研において、毎回の海況概報に流路を因示する。

(b) 小の目的と達するために観測水深と航行ワイヤーの長さ三〇〇メートルから実際の深さを三〇〇メートルとする。

(c) 各水試ではぜひ被压顕倒寒暖計と暗入されたい。(一三本)

(d) 観測結果は船筆書きでもよいから至急報告のこと。

(e) 特の採集水深は周年を通じて五〇メートルを希望されたい。

(f) 観測走線の構図を全廃する。

(g) テーブル記入事項を完全にする。特に稚魚の場合は複数開始時刻と終了時刻、特の場合のワイヤー傾角は従々にしてぬけているので特に注意してもらいたい。

(h) 渔況報告には漁期の遅延、主漁物、漁場の変遷、特異現象を専門的に記入してもらいたい。

(二) 沿岸資源調查關係

前号所載のとおり、従来のイワシ資源調査は本年よりサバ、スルメイカを含めて沿岸資源調査として実施されることになり、三月始め東京で各水研の担当者会議が開かれたが、

同結合とその保有主体として、この場合のみ
借貸を認むべきである。専が論説の中心であ
り、水在方保官との國に名義な意見の反映か

(1) 対黒喉流蹊係
二九年度経過報告

二九年度經過報告

